



# 特集 東日本大震災と 災害ボランティア

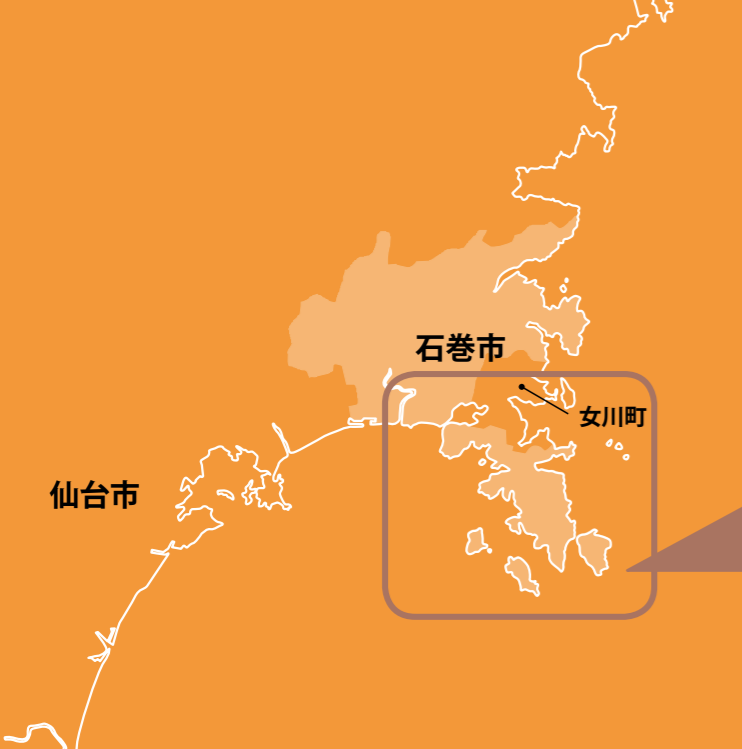
## NPO法人「キャンパー」 代表・飯田芳幸さんが駆け抜けた1年

炊き出しそのものは2か月の長期にわたった。市内にあふれかえるがれきを撤去するために「キャンパー重機隊」を編成した。行田市を始めとする埼玉県内のボランティアや物資を運ぶボランティアバスを運営した。NPOとして常々温めてきた、キャンピングトレーラーを避難所で活用する「ホワイトタウンプロジェクト」も緒に付いた。同活動に関連して、牡鹿半島にある市営キャンプ場の管理をまかされることになった。この地に拠点を置くことにより、金華山の観光振興を核にした地域復興活動の支援にもかわり始めている。

個人の、キャンパーの仲間の、あるいは被災地で新たに得た知己の、それぞれの人脈をフルに活用しながら、多種多様な支援を具体的な形にしてきた。「多くの人の善意に支えられているのがすべて。キャンパーは美味しいところだけいただいているようなものです」と謙遜する。確かにその通りではあるが、あちこちに散らばっていた多様な善意を引き寄せて集めることができたのは、飯田さんだった。

宮城県・牡鹿半島の先端、御番所山の展望台から太平洋を望む。「奥州三霊場」のひとつに数えられる金華山が眼前に迫り、空の青と海の青が彼方に水平線を引く。この場所は、陸地としては東日本大震災の震源に最も近い。

飯田さんは、埼玉県行田市に本拠を置くNPO法人「キャンパー」の代表をつとめる。キャンピングカーの愛好者が集まって作った団体で、災害発生直後の被災地を訪れ、得意の野外調理技術を活かして炊き出しなどの災害ボランティア活動を展開している。去年の3月11日後もそうだった。さまざまな苦勞を重ねて宮城県に入り、石巻市内の避難所で炊き出し活動を始めた。これまで体験した被災地支援であれば、震災から概ね半月も経てば事態は落ち着いてきたものだ。炊き出しの必要性も薄れてくるから、おのずと活動の終わりが見えてきた。だが、東日本大震災は違った。災害の規模が桁外れだった。



特集  
**東日本大震災と  
 災害ボランティア**  
 NPO法人「キャンパー」  
 代表・飯田芳幸さんが駆け抜けた1年



**発生直後から  
 出動準備を開始。  
 被災地入り直後は、  
 惨状に衝撃**

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。飯田さんから「キャンパー」の初動は早かった。翌12日には、災害ボランティアの受け入れ先となる社会福祉協議会探しの食材手配、搬送手段確保などの出動準備を開始した。受け入れ先が決定するのを待つ間も、物資や炊き出し機材の集積拠点を作るべく、キャンパー仲間を通じて宮城県大崎市に急ぎ「キャンパー宮城支部」を開設。支部への物資搬送を目的として緊急通行車両の届出申請をし、食材1万5000食、機材2トンを先遣隊とともに支部に輸送した。飯田さんを含む本体は、どうにか連絡がついた宮城県社協から石巻市立湊小学校での炊き出し要請を受け、18日に埼玉を出発した。

石巻市入りした19日、沿岸地域を目の当たりにした飯田さんはわが目を疑った。新潟県中越地震以降、炊き出しボランティアを重ねてきたが、これまで訪れた被災地とは被害の様相がまったく異なっていた。「このような悲惨な現場で我々に何かできるのか。足手まといになるのではないか」と不安にかられた。

到着した湊小学校は、教室、体育館、校庭、いたるところが津波による泥をかぶっていた。衛生環境の劣悪さのために小学校内での炊き出しは断念し、比較的きれいだった

**新潟中越地震を機に  
 炊き出しボランティア  
 「最適な炊き出し  
 メニュー」の開発を追求**

NPO法人「キャンパー」は新潟県中越地震を契機に発足した。飯田さんは当時、キャンピンググレートレーラー仲間のメーリングリストに参加し、しばしばオフ会を開催するなどして趣味のキャンプを楽しんでいた。2004年に新潟県中越地震が発生した際、「被災地で何か支援ができないだろうか」という発言がメーリングリストに流れた。飯田さんらメンバー数人は、キャンプで得た野外活動の技術や機材を活用して炊き出しボランティアをすることを決め、新潟県小国町（当時）でラーメンを炊き出しして大変喜ばれた。飯田さんは被災地における継続的な支援の必要性を実感、災害ボランティア事業を主体としたNPOの設立につなげた。

キャンパーの炊き出し活動で特徴的なのは、「被災地で実践して喜ばれた」ということだけで満足しない点だ。心理面、衛生面、調理面、栄養面などさまざまな角度から「最適な炊き出しメニュー」を追求し、日本調理科学会と共同で炊き出しメニューの開発を続けている。メニューの開発成果



**勝手が違った東日本  
 大震災の炊き出し。  
 食材調達には困難極め、  
 メニューは根菜類中心**

現場経験が豊富な「キャンパー」だが、東日本大震災の被災地は勝手が違った。長期に最も苦労したのは食材の調達だ。

わたって停電が続いたため、冷凍保存が必要な肉類は使えなかった。発生直後は水の確保も困難を極め、野菜、特に下ごしらえに多くの水を使うハウレンソウは扱いづらかった。救援物資としてさまざまな食材がキャンパーに寄せられたが、受け入れ態勢が整わないから運送会社の営業所留めにした。しかし車が手配できないために、あるいは燃料が枯渇したために受け取りがスムーズにいかない。そのような状況下だったから、常温で保存できる数種類の根菜が食材の中心になった。

「限られた根菜類だけでメニューのバラエティを出すのは難しかった。調理科学会の先生方に考えてもらった炊き出しメニューは材料がそろっているときには完璧なんです。一定規模の災害であれば、それこそ完璧に対応できる。でも、東日本大震災は規模が大きすぎた。ある程度食材を確保できるようにしたのは、ようやく4月の後半に入ってからです」。よく頑張れたと自負する半面、飯田さんは東日本大震災から得た教訓をしっかりと受け止めている。



特集  
東日本大震災と  
災害ボランティア  
NPO法人「キャンパー」  
代表・飯田芳幸さんが駆け抜けた1年



被災地ニーズに応え、  
支援内容も変化。  
ボランティアの  
独自手配や重機隊編成



「キャンパー」に限ったことではないの  
だろうが、東日本大震災における支援はと  
にかく「初めてのことに」「慣れないこと」  
の連続だった。現代日本が遭遇した初めて  
の超巨大災害であったためという理由は大  
きい。そもそも個々の災害現場によつて必  
要な支援は千差万別で、さらには刻々と変  
化するものだ。キャンパーも炊き出しだけ  
で「お役ご免」とはいかなかった。当初は  
4月20日ごろをめどに撤収する予定でいた  
が、避難所の要望もあり5月7日まで延長  
することになった。



炊き出しを続けていけばさまざまな被災  
者と話をする。「家が片付かない」「人手が  
足りない」と聞いて、飯田さんはボランティア  
を独自に手配することにした。災害ボラ  
ンティアには衣食住にかんして「自己完結」  
が求められる。ところがボランティアが利  
用するトイレさえないのが現実だ。飯田さ  
んは、地元の埼玉県行田市や自らが所属す  
る行田ロータリークラブに掛け合った。結  
果、行田市がボランティアを募集し、行田  
市社協がボランティア保険等の手続きを取  
り、ロータリークラブが車両を手配してボ  
ランティアバスの運行にこぎつけた。被災  
地でのトイレ問題を解決するために、行田  
衛生組合がバキュームカーを提供した。被  
災地に負担を掛けない、自己完結のボラン

ティアバスの運行が実現した。ボランティ  
アバスの取り組みはこの後、埼玉県ふじみ  
野市にも広がった。  
支援の拡充は人だけにとどまらない。  
キャンパーのメンバーでもある大手建設機  
械製造会社社員の口ぞえでミニ油圧ショベ  
ル3台を同社から貸与してもらった。ダン  
プカー7台も調達し、「キャンパー重機隊」  
を編成した。これらを地元建設業者に無償  
貸与し、被災地の雇用対策の一環としても  
役立ててもらった。

仮設住宅建設が  
計画的になる。  
ホワイトタウン  
プロジェクトの提案

これらの取り組みと並行して進んだのが、  
NPO「キャンパー」が長年温め続けてき  
た「ホワイトタウンプロジェクト」。これ  
は、キャンピングトレーラーなどを避難所  
や自宅避難者に利用してもらおう活動だ。手  
始めに、キャンパーが持ち込んだキャンピ  
ングトレーラーを炊き出しで縁のあった市  
立開北小学校で避難者に利用してもらった。



利用者は「避難所は一晩中明るいので」  
久しぶりに朝の明るさで目が覚めた」と喜  
んだ。その後、日本RV協会からの貸与分  
助成金での購入分をあわせた25台を市内で  
貸し出した。自宅の風呂が壊れた被災者に  
とってはキャンピングトレーラーに付いて  
いるシャワーを使えるところが好評だ。車  
で牽引してどこにも運べるから何度でも  
使いまわすことができる。

ささやかなスタートではあるが、ホワイ  
トタウンプロジェクトが目指すところは壮  
大だ。キャンピングトレーラーは、プライ  
バシーを確保できるという仮設住宅と同等  
の機能を備えつつ、可搬性があつ  
て自由に移動でき、設置場所も融  
通が利くという仮設にはない利点  
がある。全国1800の自治体が  
数台ずつ「災害用」のキャンピ  
ングトレーラーを備えたとすれば数  
千台の数になる。ひとたび災害が  
発生したら全国のトレーラーを被  
災地に集積して、臨時的仮設代わ



取り戻してもらおうような支援でな  
ければなりません」  
地域興しに立ち上がった被災地  
の活動支援は、まさにこの自立支  
援活動だと飯田さんは考える。ホ  
ワイトタウンプロジェクトの実現  
への歩みを石巻を拠点に進めるの  
は、「被災地から次なる災害に備  
える取り組みだ」という。そう、  
東日本大震災の被災地支援で完結  
するのではない。次なる災害に対  
して準備を進めている。それを「被  
災地から」始めることに意味があ  
るのだ。

被災者の自立を  
助けるのが支援。  
次なる災害に対しては、  
被災地から備える

出すことができる。キャンプという市民の  
余暇活動が災害時の被災者支援に直結する  
のだから、啓発効果も高いはずだ。

石巻におけるプロジェクトの最初の実践  
は、亀山紘・石巻市長の賛同を得た。キャン  
パーは助成金で購入した車両を石巻市に  
寄贈。将来他の地域で大規模災害が発生し  
た場合、石巻市は当該車両を被災者支援に  
派遣することを決めている。

「キャンパー」は現在、石巻市からの要  
請で牡鹿半島にある「おしか家族旅行村  
オートキャンプ場」の管理を委託されてい  
る。地震による損壊が著しく、一般開業は  
まだできないが、ボランティア団体等の宿  
泊に利用できるほどには復旧した。被災地  
における活動拠点を得たキャンパーは、地  
元鮎川浜の船舶会社による金華山観光を核  
とした地域興し活動に対しても支援を始め  
ている。

ここまでくると、誰しもいくつかの疑問  
を抱く。飯田さん、あなた本業は大丈夫で  
すか、いつまで支援を続けるつもりです  
か。種明かしをすれば、飯田さんの本業は  
会社経営。この春、社長の座を後進に譲り、  
今後は「悠々自適」を目指している。「ボ

ランティアは自分が楽しくなければやって  
いけません。道楽だからできるんですよ」。  
呵呵大笑する飯田さんだが、実際のところ  
飯田さんに支援を続けさせているのは、「善  
意を裏切ることはいけません」という強い  
倫理観だ。「多くの人の善意が繋がって、  
さまざまな取り組みが形になった。これを  
中途半端に途切れさせて、善意を裏切るこ  
とはできません」。

正直な気持ちを吐露すれば、東日本大震  
災の支援が長引くなかでジレンマを感じる  
ことはある。「被災者の一部に、支援を当  
然のことに受け止めるかのような風潮を感  
じることがあります。本当に被災者の自立  
を助ける支援になっているのかどうか。本  
来の支援は、被災者の面倒をまらること見  
ることではありません。その人が自立に向  
かって歩みだすのを助けることです。自ら  
立ち上がって生きていこうという気持ちを

「今年の3月11日、どう過ごされました  
か？」と飯田さんが問うてきた。飯田さん  
自身は「家族とともに過ごす決めていて、  
そうしました」という。この1年、石巻と  
埼玉を何十回と行き来してきた。被災地で  
犠牲者に思いをはせる、献花をして黙禱す  
るのもひとつの過ごし方だった。

被災をまぬがれた私たちは今日も、当  
り前のように目を覚まし、食事をし、働い  
ている。だが、一瞬にして亡くなった多く  
の犠牲者は、目を覚ますことも食事をす  
ることも働くこともない。「今生きているこ  
とに感謝しなければならぬと思うと、3・  
11は家族と過ごす日だと決めたんです」。  
飯田さんは優しく笑った。細い目がより細  
くなった。